

会議・視察報告

延辺朝鮮族自治州訪問記

延吉・図們・琿春

ERINA調査研究部研究主任 三村光弘

2007年6月24日～6月30日、中国・吉林省の延辺朝鮮族自治州を訪れた。今回は、延辺大学との学术交流と図們市、琿春市の各政府（市役所）に対するインタビューが目的であった。

延辺大学訪問

延辺大学は、自治州政府の所在地、延吉市にある、吉林省南部随一の大学である。民族自治地方にある、民族語（延辺大学の場合は朝鮮語）や民族の歴史などを教える大学としても知られている。教職員の過半数が朝鮮族なので、大学の中では、朝鮮語を聞くことも珍しくない。また、朝鮮語を教えるコースには、韓国や北朝鮮との経済交流のために朝鮮語を習得しようとする漢族をはじめとする朝鮮族以外の学生も多いとのことであった。

今回は延辺大学の機構のうち、人文社会科学院、東北亜研究院、経済管理学院を訪問した。筆者の専門が朝鮮法や朝鮮経済、北東アジア経済協力であることもあり、話題の中心は北東アジアの経済交流における中国東北地方、特に延辺地方の発展可能性や中朝経済協力についてであった。

六カ国協議の進展などで、北東アジアの国際関係が激変しようとしている現在、その「現場」の一つである延辺では、自らの置かれた地理的環境をどのように地域の発展に生かすか、ということが重要な研究課題として浮上しているようであった。その点で、ERINAの活動は大変注目されており、今後の研究協力の強化についても期待が寄せられた。

鉄道の街 図們

次に訪れたのは、図們であった。図們では図們市商務局を訪問し、最近の図們市の外国投資の状況や貿易状況についてのヒアリングを行った。貿易に関しては、2004～06年は輸出入合わせて1億ドル以上に達しており、北朝鮮との貿易が比較的多いとのことであった。中朝貿易は中国の輸出が穀物、石炭、コークス、織物、輸入が鉄精鉱、銑鉄、水産物とのことであった。外資企業は47進出しており、その大多数が韓国、日本企業は2社、アメリカ企業が1社、北朝鮮企業が1社（食堂）とのことであった。

後述する琿春が、開発区の設置など経済開発が相対的に進んでいるのに対して、図們市は中朝国境にありながらも、現在はそれほど目立たない存在である。しかし、図們市としては、朝鮮半島の東海岸に接続する鉄道を持っているのは、図們だけであるので、今後大量の物流を必要とする経済交流が行われるときには、鉄道の街である図們の重要性が再浮上すると考えている、とのことであった。実際に、図們は旧満州時代には長春、牡丹江、羅津、清津方面の列車が行き交う大ジャンクションであった。現在でも都市面積に占める鉄道用地の比率は高く、鉄道輸送需要増加に対する期待は大きい。

北東アジアのアーヘン 琿春

次に訪れたのは、中国・北朝鮮・ロシアの3国国境に接する琿春市であった。琿春市は、延辺朝鮮族自治州唯一の国家級経済開発区を持つ都市であり、吉林省が推進している海への道（ロシアに対しては「路港関一体化」、北朝鮮に対しては「路港区一体化」という名前でプロジェクトを行っている）の出口にあたる街である。

琿春の街は、ここ数年で市街地の改修が進んでおり、今回の訪問中にも市内の道路に中央分離帯を作り、植林を行う作業が進んでいた。繊維産業の他に、最近では中密度繊維板（MDF）の生産や家具の製造などが急成長しているとのことであった。また、鉱業も成長しており、金や銅の鉱山、炭坑が好調で、現地とれる石炭で発電（大唐国際発電系列の発電所がある）を行っているとのことであった。

琿春は、北朝鮮とロシアに隣接しているという地理的条件から、写真1と写真2のように、市内のバスターミナルにもロシアのスラビヤンカ、ウスリースク、北朝鮮の羅先に向かう国際バスも発着している。1日に各2本ずつと本数は少ないが、今後北東アジアの経済交流が活発になれば、ヒトの動きも活発になり、オランダ、ベルギー国境に接するドイツのアーヘンのように国境を超えて日常生活が営まれる街になるのではないかと期待される。



写真1 琿春バスターミナルの国際バス切符売り場



写真4 防川の展望台からハサン駅を望む



写真2 琿春バスターミナルの時刻表

中・朝・ロシア三国国境地帯 防川

琿春市を訪れた後、中国、北朝鮮、ロシアの国境地帯である防川を訪れた。北東アジアのあちこちを訪問してきたが、防川を訪れたのはこれが初めてであった。

防川の展望台から、図們江河口を望む（写真3）。あいにくの天気で霧が出ており日本海は見えなかった。北朝鮮とロシアを結ぶ鉄道橋がすぐ目の前に見えた。左側には、ロシアの国境駅であるハサン駅が見える（写真4）。



写真3 右側が中朝国境の図們江、中央の建物の右下が中国

この風景を見て、吉林省がなぜロシアと北朝鮮との国境地帯の経済交流を強化し、日本海への出口を作ろうとしているのが再確認できた。このルートは新しい北東アジアの交流のための出口であるとともに、北朝鮮側の出口である羅津港は、旧満州時代に実際に経済交流が行われた場所である。羅津港へは、敦賀港と新潟港から客船が往来していた。

実際にこれらのルートが活発に動き出した場合、中国の南北を結ぶルートの他に重要なルートとなるのは日本と中国を結ぶルートとなる。現在は、日朝関係が緊張しているため、日本から北朝鮮経由での中国・東北地方への物流ルートについて真剣に論じられてはいないが、今後北東アジアをめぐる国際情勢が大きく変化した場合、この地域は日本にとって戦略上きわめて重要な地域となる。

今回、防川を訪問して、北東アジアにおける経済交流の活発化は、単なる夢物語ではなく、近い将来必ず起こりうる当然の動きであると感じた。